

重紐論と日本漢音

沼本克明

一、はしがき

本邦に伝来した漢字音を考察する際異音の場合であれ漢音の場合であれ一般に切韻系韻書に沿って考えられて来た。即ち切韻系韻書の体系に対し日本漢字音の表記が如何なる形を取っているかによってその体系や変化を考えて行こうとする方法が取られて来たのである。但その際の問題は「同一声母同一韻母に所属する漢字は日本漢字音でも全て同一の形を取って表記されるはずである」という考え方が強く支配していたという事である。が、この様な考え方の欠陥については有坂秀世博士によって指摘され具体的な資料による帰納的な方法が必須である事が明らかにされた。^(注1)その後これに加え更に日本漢字音の基盤となった中国原音の正確な知識に裏付けされながらの追究が必要であり正にその方法によって日本漢字音上の諸問題が氷解して来る事が説かれて来たのである。^(注2)

本稿は日本漢字音の中の漢音に関して如上の観点から一端の追究を試みようとしたものである。

注1・『「帽子」等の仮名遣について』(「国語音韻史の研究」所

収)

2・藤堂明保「吳音と漢音」(「日本中国学会々報」第十一集)。

「国語国文」三七―三八巻中の岡本勲氏の諸論稿。

二、重紐論の展開

1、支那語に於ける重紐論

カールグレン氏は拗音韻(韻図の三・四等韻)を分つて α 韻(三四等兩屬韻)、 β 韻(三等專屬韻)、 γ 韻(四等專屬韻)、の三つとされた。所謂重紐による韻母の対立はこの α 韻の中の支・脂・祭・真・仙・宥・侵・塩の諸韻に於いて唇・牙・喉音声母と結びつく場合に存在する。カールグレン氏はこの重紐の区別は全く無視された所であるが有坂秀世博士が「カールグレン氏の拗音説を評す」^(注1)、河野六郎博士が「朝鮮漢字音の「特質」」で明らかにされ、而博士は重紐による韻母の対立を拗介者の i と i との相違であることを明らかにされた(以下河野博士に従い拗介音 i を持つものを甲類 i を持つものを乙類と呼ぶ)。^(注2)

さて α 韻に於いて重紐の対立のない舌・齒・半舌・半齒音声母と結びつく場合の拗介音が甲類乙類のいずれであつたかが次に問題となる。この点に関しても先引の河野博士の論文に詳しいが要約して示

この点に關し河野博士は次の如くに説かれている。『一前略―即ち甲と乙との相違は朝鮮音では拗音が直音かの差異である。而して乙類が直音となつてゐるのは正しく介音^子の故である。例えば乙類は *kim>kan*、宮は *kiu>kiup* の変化を辿つたのである。此の直音化の傾向は日本呉音にも同様見られる所である。例えば近コン隱オン(仮名オ) 乞コツ乙オツ(仮オ) 権ゴン金コム(仮コ) 音オム 宍オウ(仮オ) 興コウ(仮コ) 億億オク(仮オ) 具グ居挙コ有ウ供クウ宮クウ強ガウ等』。即ち重紐甲類乙類の區別は朝鮮字音に於いては拗音対直音の差として現われているのであつて甲類は拗音で乙類は拗介音が消失して直音の形で現われるという明瞭な対応を示す。我が呉音の場合も乙類に属する近コン隱オン以下の諸例はいずれも拗介音が表記上現われず全て直音で表記されるといふ風に朝鮮字音と全く同一の傾向を示すといふのである。尚この点に關しては有坂博士も捺拏諸転字を取上げて論じられて^(注11)いる。

さてそれでは日本漢音はこの重紐甲類乙類と關係があるか否か、あるとすればどの様な対応を示すと考えられて来たのであろうか。この点に關し再び河野博士の御説を引いてみると『唯韻英にも此の區別(重紐甲類乙類の區別)が明瞭であるにも拘らず、同じく長安音を伝へている日本漢音には見えないのは奇妙である。日本語の音韻組織は当時斯かる細部迄写し得なかつたのであらうが、漢音の母胎たる支那音には朝鮮音、呉音に於けるが如き中舌音化の傾向が顯著でなかつたと考へることが出来る。(傍点筆者)』^(注12)の様^(注13)に日本漢音には重紐の區別は反映していないと説かれてゐるのである。

注1…「國語音韻史の研究」所収。

2…「言語研究」第三号所収。

3…この他に重紐の區別を①主母音の広狭の別(周法高「広韻重紐の研究」)中国語言学論文集②介母と主母韻兩者の別(藤堂明保「中古漢語の音韻論的対立」日本中国学会会報第一集)③声母口蓋化要素の有無(三根谷徹「韻鏡の三四等について」言語研究二三号)等の説があるが本稿では有坂・河野説に従つておく。

4…注1引用書三五〇頁以下。

5…河野六郎「朝鮮漢字音の研究Ⅱ」(朝鮮学報三十三輯・一二六頁以下)

6…注1注2注5引用論文。

7…藤堂明保「中国語音韻論」一八一―一九一頁。

7' 有坂秀世「カールグレン氏の拗音説を評す」(「國語音韻史の研究」)

8…「國語音韻史」二二二―二二一頁以下。

9…注2引用論文。

10…注2引用論文、四八頁。

11…注1引用書、三四四頁。

12…注2引用論文、五二頁。

三、重紐甲類乙類と日本漢音

先の如き河野博士の論が従來の考え方であるとすれば支那語に於ける重紐甲類乙類は日本漢音には反映しないと考えられて来たことになる。しかしながら具体的な日本漢音の資料に当ててみるとこの重紐論の考え方を導入しない限り解釈出来ない表記が見出される。

そこで具体的な漢音資料によって再考を加えてみたいと思う。

漢音資料として取上げたものは次の九資料である。

①漢書楊雄伝天厝点(九四八年)。

②長承本蒙求朱点(天厝頃)。

③法華經釈文真興点(九七六一〇〇四年)。

④史記延久点(二〇七三年)

⑤興福寺大本慈悲寺三藏法師伝(A点一〇八〇年頃、以下⑥点一七〇年まで六種)。

⑥胎藏界自行次第天永点(一一一三年)。

⑦文鏡秘府論保延点(一一三八年)。

⑧仁治本古文孝経(一二四一年)。

⑨蒙求鎌倉中期点(一二五〇年頃)。(注1)

カールグレン氏は拗音韻を分つて $\alpha\beta\gamma$ の三つとしこの内重紐甲

類乙類に關連する α 韻 β 韻を次の如くに定めている。(注2)

○ α 韻…果攝(麻馬禡) 止攝(脂旨至 開合支紙置 開合・之止志) 蟹攝(祭 開合)

咸攝(鹽琰豔葉) 深攝(侵殺沁緝) 山攝(仙彌線薛 開合)

臻攝(真軫震質・諄準稕術) 梗攝(清静・勁昔 開合 蒸拯證職 開合)

宕攝(陽養漾葉 開合) 効攝(宵小笑) 流攝(尤有宥) 遇攝(魚語御・虞麁遇) 通攝(東送屋・鍾腫用燭)

○ β 韻…止攝(微尾未 開合) 蟹攝(廢 開合) 咸攝(嚴嚴釅業・凡范 楚乏) 山攝(元阮願月 開合) 臻攝(欣隱愀迄・文吻問物) 梗攝

(庚梗映陌 開合)

日本漢音の考察の場合もこのカールグレン氏の分類に従うと都合が

よいので以下これにそつて考へて行く。

1、 α 韻

α 韻の場合は唇・舌・牙・齒・喉・半舌・半齒音字いずれもがい拗介音は甲類乙類の両類が存在する。

この韻の日本漢音での表記を見ると原音の拗介音の甲類乙類がいずれの場合も表記されているものといずれの場合も表記されていないものがある。

まづいずれも表記されている韻例を例示する。

◎東韻

②甲類…充シウ(2)

乙類雄…イウ(2) (馮フウ)。(注3)

③甲類…蟲チレ衆シレ隆ル

⑤(A)乙類…弓キウ(豊フウ)

④甲類…衷チウ嵩シウ(3)融ユウ

乙類…穹キウ(2)躬キウ雄イウ(2)

①甲類…沖チウ蟲チウ終ジ嵩シウ嵩まウ嵩スウ隆リウ(3)

乙類…躬キウ雄イウ崇ソウ

⑥甲類…我シウ禽シウ

乙類…鄼ホウ菅モウ(2)

⑦甲類…中チウ衆シウ(6)

乙類…宮キウ

⑦甲類…嵩シウ充シウ融イウ

乙類…宮キウ崇ス雄イウ(2)熊イウ(馮フ(2)鄼ホウ(2))

⑧甲類…寵チウ(2)終シウ

乙類…宮キウ窮キウ(風フウ)

⑨甲類…仲チウ忠チウ充シウ戎シウ嵩シウ隆リウ

乙類・躬キウ雄イウ熊イウ（風フウ馮フ鳳ホウ豊ホ）

右に見る通り甲類乙類に限らずいづれの場合にも「㉔ウ」という表記を取っており原音の拗介音の相違が区別されることなく表記されている。この様にα韻の中で拗介音が甲類乙類共に表記されている韻は次の諸韻である。東（上去声を撰ず。以下同）・屋韻、鍾・燭韻、支韻、脂韻、之韻、魚韻、真・質韻、諄・術韻、麻韻、陽・葉韻、尤韻、侵・緝韻、蒸・職韻。

但し若干の例外が存するのでこれに関して検討を加えておく。

例外の第一は齒上音（正齒二等）字に於いて拗介音が表記されていないものが存する点である。

◎東韻、（正齒三等・齒頭音の場合「シウ」）

⑤㉔崇ソウ

⑦崇ス

◎魚韻（正齒三等・齒頭音の場合「シヨ」）

③所ソ

④（所シヨ）

⑤㉔楚ソ◎所ソ組ソ疎ソ鼠ソ礎ソ㉔所ソ②疎ソ楚ソ鼠ソ②㉔阻ソ

(3)

⑥所ソ

⑦阻ソ礎ソ楚ソ②初ソ韻ソ疎ソ（疎シヨ）

⑧疎ソ②所ソ③（所シヨ）

⑨初ソ楚ソ

◎陽韻（開口）（正齒三等・齒頭音の場合「シヤウ」）

②（装シウ）

③莊サレ

⑤㉔状サウ⑥莊サウ◎壮サウ爽サウ莊サウ②装サウ⑥壮サウ爽サウ

⑦壮サウ爽サウ愴サウ状サウ（状シヤウ）

⑧爽サウ

⑨莊サウ装サウ霜サウ

◎尤韻（正齒三等・齒頭音の場合「シウ」）

⑦駒ス②

⑨郷ス

以上の四韻は原則として齒上音と結びつく場合拗介音は表記されていない事が明らかである。齒上音と結びつく場合の拗介音は乙類である。そして先述した様に乙類拗介音は音声的弱化傾向を持ちかつ河野六郎博士の朝鮮漢字音の詳細な研究によれば齒上音字の拗介音は全て消失し直音の形で現われて来る。日本漢音での如上の表記はこの朝鮮漢字音の情況と全く軌を一にするものであり重紐に於ける甲類乙類の相違を反映しているものと解釈出来る。（注）尚右に掲げた実例の中に「シヨ」「シヤウ」と拗介音が表記されているものがある。この様な例について今考える所は無いが或は原音の乙類拗介音が全く音声的に消失してしまっていた事を示すものであろうか。

次に第二の例外として影母三等・于母と結びつく場合原音の拗介音が表記されない韻が存する。

◎陽韻（開口）影母三等

③央アレ、④益アウ、⑤㉔殃アウ◎快ヤウ、⑦央ヤウ

◎陽韻（合口）于母

⑨王ワウ

陽韻合口の影母三等字に於いて同時に「ヤウ」という表記も見られる事と考へる。但前者に於いて同時に「ヤウ」という表記も見られる事と考へ合わせれば拗介音^イが完全に音声上消失していなかた^(注5)た爲転写され得た場合とそうでない場合とがあらうと考へる。従つて漢音の字音假名遣としてはこの両者が認められるべき可能性があらう。尚陽韻合口の影母三等字に關しては実例が見出せないで考察を保留せざるを得ない。

次に甲類乙類いずれの場合も拗介音が表記されていない韻例を示す。

◎祭韻開口、

②甲類、齋エイ。

③甲類、銳セイ。

乙類、憩ケイ、偈ケイ。

④甲類、制セイ。

⑤(A)甲類、藝ゲイ(2)。

⑥甲類、藝ケイ、筮セイ滞テイ(2)、(滞タイ)、例レイ、厲イ。
 ⑦甲類、逝セイ滞テイ(2)。
 ⑧甲類、藝ケイ、(藝キ)。

⑨甲類、世セイ(3)。

⑩甲類、蔽ヘイ、袂ヘイ、避テイ、滞テイ、際セイ(2)、制セイ。

⑪甲類、制セイ(4)、祭セイ(祭サイ) 穢レイ(2)。

⑫甲類、制セイ。

⑬甲類、制セイ。

上に祭韻の場合の例を取上げたが実例で見ると通り甲類乙類共に原音の拗介音が表記上に現われて来ない。これと全く同一事情の韻は次の諸韻である。仙・薛韻、宥韻、清・昔韻、塩・葉韻。これ等諸韻は日本漢音では重紐甲乙の相違に關しては全く無関係ということになる。

以上α韻について考へて来たが今一つ保留して来たものに虞韻がある。虞韻の日本漢音での表記が非常に複雑である事は既に指摘されて来た。しかしその原因に關しては詳らかにされてない。今の虞韻の日本漢音での表記を重紐甲類乙類という観点から整理してみると次の如くに極めて明瞭な対応を示す。

①甲類、厨ツウ諭ユ

乙類、矩ク驅ク虞ク紆ウ(兪フ)

②甲類、乳□ウ

乙類、詡ク于ウ(兪フ扶フ俦フ敷フ務フ)

③甲類、住チウ趣ス庾ユ

乙類、句ク駒ク数ス(甫フ)

④甲類、注シユ俞ユ諭ユウ

乙類、勾クウ

⑤(A)乙類、衢ク

⑥甲類、齋イウ乳シウ(2) 蛛シユ柱チウ(2) 蛛チウ誅チウ 緇チウ 龜

テウ掄ユ(2) 縷リウ

乙類、于ウ宇ウ羽ウ矩ク區ク(2) 驅ク(3) 衢ク(扶兪符赴俦鉄輔 鋪瓌フ甫鋪ホ霧ム)

⑦甲類、裕イウ錡シウ乳ジウ(2) 掄ユ踰ユ縷リウ

乙類、于ウ字ウ羽ウ區ク(5)驅ク驅ク懼ク(2)具ク遇ク虞ク(扶
虜赴俯釜符鉄輔フ无俚フ務ム)

⑥甲類、腴イウ駐チウ屢リウ屢リウ

乙類、于ウ肝ク煦ク漚ク隅ク虞ク

⑦甲類、住チウ(3)

乙類、具ク数シウ兩ウ(父無(4)敷无(4)フ)

⑦甲類、柱チウ厨チウ聚シウ枢シウ銖シウ堅シウ孺シウ孺シウ庠
イウ逾ユ莢ユ(縷ル)

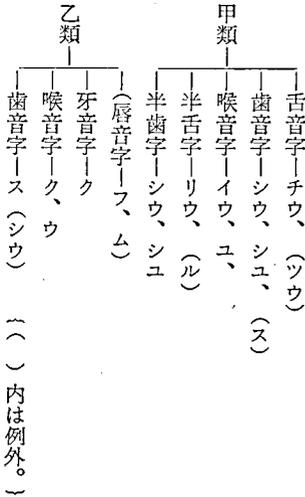
乙類、短ク隅ク馮ク虞ク蜈ク数ス藍ク羽ウ馮ウ于ウ(黼甫
俯府斧甫附苻昧峰無フ浦歸ホ)

⑧甲類、誅チウ贖シウ取シユ侏シユ儒シユ

乙類、虞ク(2)短ク兩ウ(附膚鉄遺輔フ甫ホ)

⑨甲類、柱チウ趣シウ趨シユ儒シユ殊シユ殊シユ

乙類、于ウ嶋ク詡ク(符負扶敷傅兎巫誣撫務フ)
これを整理すると次の様になる。



即ち極めて僅少の例外を除いて、

甲類ー①ウ、①ユ、ユ
乙類ー②、

という明瞭な表記の区別がある。参考としてここにも朝鮮漢字音の表記を取出せば、虞韻表記は甲類は ㄱ (ㄱ) 乙類は ㄴ (ㄴ)と明瞭に拗直の差として現われて来る。日本漢音に於ける右の虞韻の表記はこの朝鮮字音の状況と軌を一にするものであって、我が日本漢音の基盤となった唐代長安方言に於いて拗介音 ㄱ が消失していたか又は音声的に弱化傾向を示していた事を反映していると思われる。即ち虞韻には甲類乙類の拗介音の相違が反映していると考えられる。

2、β韻

β韻の諸韻は原則として唇・牙・喉音字しか無い。齒音字がある場合は必ず正齒二等字である。従って重紐甲類乙類という点から言うとβ韻の拗介音は全て乙類である。

さてβ韻の漢音表記を九資料によって調査してみるとα韻の場合と同様に原音の拗介音 ㄱ が表記に現われている場合と全く現われていない場合とがある。

まず拗介音が表記に現われている場合についてみる。

◎欣韻。

⑤乙類、㉞亂シン殷イン(2)㉞亂シン近キン勤キン

⑥乙類、勲キン慇イン

⑦乙類、斤キン筋キン慇イン

⑧乙類、殷イン隱イン

全て「㉞ン」という形で表記されていて原音の乙類拗介音は消失

していない。異音の場合本韻の表記が「㊦ン」と拗介音を消失する^(註10)のと相違して、重紐甲類乙類の相違には無関係と考えられる。佐韻微韻の場合も同様に考えられる。

次に拗介音が表記に現われていない場合。

◎元韻(開口)

㊲乙類、軒ケン

㊳乙類、㊴偃エン(2)軒ケン(5)建ケン(5)鍵ケン(2)(軒カン)

㊵獸ケン健ケン鍵ケン(2)軒ケン(2)蹇ケン(2)獸ケン

㊶乙類、獸ケン言ケ

㊷乙類、建ケン(2)健ケン(2)獸ケン言ケン軒ケン(2)偃エン

㊸乙類、言ケン(2)

㊹乙類、建ケン言ケム

右に見る様に原音の拗介音は表記上現われず全て「㊦ン」の形で表記されている。これと全く同一の傾向を示す韻は月韻、廢韻、文・物韻、庚・陌韻、蔽(凡)・業(乏)韻、の諸韻である。但問題はこれ等諸韻の場合その拗介音の無表記が乙類拗介音の弱化を反映したものでどうかには検討が加えられなければならない。何故ならばこれ等諸韻は乙類拗介音しか持たないからである。

一般的に言って音韻数の多い言語を音韻数の少ない言語で転写する場合 Vocalism の点に於いて原音の歪曲を余儀なくされる。支那語を日本の仮名で転写する場合にもこの事は言い得る。特に支那語の様に二重母韻三重母韻の多い言語を日本語の如き単純音節〔S+V〕言語を表記する為の仮名で転写する場合この傾向は著しい。今α韻の中で甲類乙類拗介音共に日本漢音で表記されていない場合についてみれば次の様な原音の音節構造を持っている。(合口及び

入声は省略、音価はカールグレン氏により補訂を加えた。)

(韻目) (甲類) (乙類) (日本漢音の表記)

祭韻 *iei* *iei* 甲類乙類共に㊵イ

仙韻 *ien* *ien* " ㊵ン

宵韻 *ieu* *ieu* " ㊵ア

清韻 *ieo* *ieo* " ㊵イ

塩韻 *iem* *iem* " ㊵ン

即ち原音は拗介音の次に前舌の中心母韻*e*を持ち日本漢音ではその中心母韻だけが転写され拗介音が無視された事が分かる。

さてβ韻の乙類拗介音が表記に現われていない場合の原音と漢音表記の関係を先と同じ様に表示すると次の如くになっている。

元韻 *uai* ㊵ン

廢韻 *iawi* ㊵イ

文韻 *ieni* ㊵ン

庚韻 *iai* ㊵イ

蔽韻 *uai* ㊵ム

即ちα韻の場合と同様、原音の二重母韻(又は三重母韻)のうち前舌の中心母韻だけが転写されているのである。従ってこれ等諸韻の場合は日本漢音で拗介音が表記されていないのはそれが乙類拗介音である為ではないと考えられる。

但し日本漢音で右の中但一つ「㊵ン」という表記を取る文(物)韻の場合には事情が異なる。文韻の表記例を見ると次の様になっている(唇音は軽唇音化するので不問とする)。

㊵(㊵)訓クキン郡クキン、㊵(㊵)鼠ウン質ウン韻キン勲クン、

㊵(㊵)雲キン(3)群クキン群ク

- ⑦ 眞ウン 醜ウン 恆ウン 運ウン 群クン 裙クン 劬クン 郡クン
 ⑧ 訓キん (4) 群クン 羣クン
 ⑨ 雲ウン 群クン 群クキん

右に見る様に牙・喉音字の場合「クン」「ウン」という拗介音の表記されていない形と共に一方「クキン」「キン」という形も見出される。これは恐らく「クキン」「キン」が中古原音に近い表記であって「クン」「ウン」は拗介音が乙類である為その弱化を反映している表記と考える。従って文韻の場合には重紐乙類の反映があると考えられる。尚⑧訓キんは日本語に入ってから後の所謂直音化であらう。

注1、これ等諸資料は現時点に於いて筆者の見得る漢音資料の中時代的にも早く純粹さに於いても秀れたものである。尚、⑤は築島裕博士「興福寺大慈恩寺三藏法師伝古點の国語学的研究・研究篇」、⑦は柏谷嘉弘氏「圖書寮本文鏡秘府論字音点」、⑨は有坂秀世博士「正倉院御蔵旧鈔本蒙求の漢音」の分韻表を参照し多少の補訂を加えた。又①②③④⑥⑧は私に作製した分韻表による。

- 2、「中国音韻学研究」(趙元任・李方桂華訳本) 四七一頁以下。
 ちなみに各韻の定義は次の如くである。α 韻—有些韻在j化声母後頭(三等)跟在純声母(四等)の後頭一様の可以出現。β 韻—別外有些韻只有j化的声母(三等)。(這些韻字全在韻表的三等)。
 γ 韻—第三類的韻只有純声母(四等)。(這些韻裏的字全在韻表的四等)。尚東韻等は二等字も含むが言うまでもなくここで用いた東韻は三四等に限るのである。他の場合も同じ。
 3、唇音字(日本漢音ではハ・バ(マ)行表記)に限って拗介音が表記されていない。これは中古漢語に於いての輕唇音化の過

程に於ける拗介音の消失を反映している為と考えられる。この点に關しては別に論じらるつもりであるが以下一応唇音字は()で包んで別扱いとしておく。

- 4、河野六郎博士「朝鮮漢字音の研究Ⅲ・Ⅳ」。尚藤堂博士は正齒二等の直音表記を捲舌音化によって説明されている(「呉音と漢音」日本中国学会報第十一集・「中国語音韻論」)。又注1引用築島博士著書一七八頁にも論がある。

- 5、正安本文選墨点にも「中チウー央ヤウ」が見られる。
 6、注1引用築島博士著書一七九頁。

- 7、築島博士は「樓ロウ・儂ロウ」を本韻字とされているが、集韻では「郎侯切」の音があり「ロウ」は侯韻字の表記と考え表から省く。又「拘コウ」も侯韻字である。

- 8、「朝鮮漢字音の研究Ⅳ」(「朝鮮学報」三十五輯一八七頁以下)。

- 9、藤堂博士は「呉音と漢音」の中で虞韻の舌上音字の柱、住が「チウ」と表記されている点について論じられている。
 10、ちなみに呉音資料の欣韻表記は次の様になっている。

- ◎ 聖衆来迎寺藏妙法蓮華經、
 欣ゴン 慳ゴン 慳ゴン 筋ゴン 觀ゴン

- ◎ 高山寺本貞元華嚴經音義、
 勤ゴン 塗ゴン 筋ゴン 筋ゴン 筋ゴン

- 11、微韻の場合の漢音表記に於いてイ列音が現われるのは原音の一韻尾を表記した可能性もある。

- 12、日本漢音の基盤となった唐末長安方言を反映している靈琳一切経音義では元√仙乙、廢√祭乙、嚴√塩乙、の韻合流を完了

している。この点からも元廢嚴韻等の拗介音の無表記が祭仙塩韻等と同一原因に依っていることが確かめられる。

四、まとめ

以上日本漢音と重紐甲類乙類拗介音との関係について論じて来た。結局従来日本漢音には重紐甲類乙類の相違は反映していないと説かれて来たのであるが、部分的に、廣韻、東・魚・陽・尤韻の齒上音、陽韻開口影母三等、同合口于母、文韻牙喉音、等に乙類拗介音の弱化を反映していると考えられる。

さて次に当然問題となるのは何故漢音には重紐による相違が部分的に僅かしか反映していないかという事である。既に引用した様に河野博士は漢音の母胎に於いては中舌音化が顕著でなかった為であるかとされた。河野博士はこれに続けて次の様に述べられている。

『やがて唐より宋を経て此の区別は北方に於いても、南方に於いても崩壊し、元代には既に乙類は甲類に包摂され、…中略…。北方に於ける両者の混乱は種々の例外を生んでゐるが、その最も好個の例は弓宮恭共等である。此等は現代官話音では概ね *kun* となつて *i* の介音を脱しているが、此は正則の發達ではない。何となれば同韻の窠は *tšüŋ*、胸熊は *šüŋ* と正則の發達をしてゐるからである。…即ち北方で唐宋の間に *k iuŋ* (甲) と *k iuo* (乙) との相起が起り、其の結果弓宮等は古形 (*K iuo* √ *kun*) が採用され、穹胸熊等は新形 (*k iuo* √ *tšüŋ*, *h iuo* √ *šüŋ*) が採用されたのであらう。』日本漢音の母胎が北方長安方言でありかつ時代的にも切韻系韻書より秦音系韻書に合致する事を考慮するなら

ば正に河野博士の説かれる、乙類の甲類への包摂過渡もしくは完了の状態を日本漢音は反映している為に重紐の相違が部分的にしか反映していないと考える。この事は河野博士が取上げられた宮恭等の字音に於いても裏づけ出来る。本論の主資料の一つとして引用した高山寺藏胎藏界自行次第は天永元年に加点了された字音点であるが分韻表で整理してみると純粋な漢音資料である。その鍾韻字の表記は次の様になっている。奉母—奉ホ□、澄母—重チヨウ、見母—恭クウ(3)供クウ(2)。日本漢音の鍾韻表記は唇音字をのぞき原則として「㊦ヨウ」「クキヨウ」「ヨウ」の様に拗音素も表記される。ところが本自行次第ではカ行表記に限り全て「クウ」と表記されている。此様に鍾韻の特定字に限って直音表記が見られる現象は河野博士の指摘された如き北京官話の情況と傾向を同じくするものであり、本自行次第の漢音の基盤となつた北方長安方言では拗介音 *i* は一方では *i* に併合され一方では消失へと別の経過を取つていたと考えられる。但ここで注意しておかねばならないのは他の漢音資料で鍾韻カ行表記に「クウ」という表記を全く取らないものもある事によつて日本漢音が漢音という名目で全てを包括し得ないであらうという点であつてこの点は尚追究しなければならぬ。^(注5)

本稿で論じた重紐乙類拗介音の弱化現象などは支那原撰の韻書や韻図には全く反映していない。従つてそれは音韻上の現象ではなく音声上の一つの傾向と考えられるのである。日本漢字音の追究に於いても韻圖や韻書のみによつていたのでは、支那本土に根強く存在していたであらう音声的な傾向を反映した点を全く無視する危険性が存する。本稿はかような点に關しての一つの解釈の試みである。

尚当然の事ながら、呉音と重紐との関係、重紐論の立場からの日本漢字音のアヤワ三行定位の問題、についても更に考える必要を感ずる。

注1、「朝鮮漢字音の一特質」(「言語研究」第三号、五二―五三頁)。

2、「国語学辞典」漢音の項では「漢音の源流は隋唐の北方標準音であるから広韻など切韻系の韻書の音に一致する」と説かれているが、日本漢音の表記を分韻表で整理してみると豊琳一切経音義等の秦音系韻書と近く、切韻系韻書と一致しない点がある。

3、隋唐以後輸入された漢音の中に色々の系統があった可能性については有坂博士も「悉曇藏所伝の四声について」(「国語音韻史の研究」五九八頁)で論じられている。尚、この資料の「クウ」は呉音の混入したものとも考えられる。しかし、五例全て「クウ」となっている事、及び、本目行次第の性格から考えて、以上の如く解釈する。

4、音声上の傾向である為に正式な韻書や韻図に表面化しない点については有坂博士『帽子等の仮名遣について』(「国語音韻史の研究」二七七頁)、岡本勲氏『日本漢字音に於ける頭字音の清濁―韻鏡清の字にして日本字音濁となるものに就て―』(「国語国文」第三八卷第一号)等に論がある。

〔後記〕本稿は第三回広島大学国語談話会に於いて発表したものに手を加えたものである。その際諸氏に色々御教示を得た。又佐々木峻氏には成稿後御一読願ひ種々有益な御助言をいただいた。合わせ

て感謝申し上げる。但頂戴した御教示が十分生かされていないのは全て私の不勉強の責任である。——広島大学大学院学生——

〔補〕一八頁注5に次の例を補加する。

○ 長承本蒙求

缺ヤウ

○ 世尊寺本字鏡

缺ヤウ

○ 史記高祖本紀鎌倉期点

快ヤウ

尚、「央アウ」の如くアウ表記の例は多出するので特に例示することはしない。